

# 江島

観世弥次郎作

季は	地は	シテ	ワキ	ツレ	シテ	ワキ	前
		天女	天女	漁夫	漁翁	勅使	
四月	相模	五頭龍王	弁財天女				後に同じ

「治まる折を江の島や。 く。 動かぬ国ぞ久しき。

詞 「そもそも是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なり。さて

も相模の国江野と云ふ浦に。去んぬる卯月十日あまりに。不思議の奇瑞さまぐあつて。海上に一の島涌出す。即ち江野になぞらへて是を江の島と号す。島の雲上に天女顕はれ給ふ。是れ弁財天影向の地にて。福寿円満の靈地なれば。急ぎ見て参れとの勅に任せ。唯今東海道に下向仕り候。

「東路も。其方の空に行く雲の。 く。 影も涼しき鳴の海。遙けき旅を駿河なる。富士の高嶺の月影も。いく山々に移り來し。相模の国に着きにけり。 ク。

「日を重ねて急ぎ候ふ程に。是は早相模の国江の島に着きて候。此浦の者を相待ち。事の由をも窺はゞやと存じ候。

「島つ鳥。浮海松涼し波の上。有明残る朝ぼらげ。

ツレ  
「波もて立つや夏衣。

二人 「浦ふれ渡る沖つ風。

シテサシ  
「それ江の島は崑崙の奇を移し。五丈の垣重なほけ  
れども。

二人 「蓬萊海の勢を伝へたる。三壺の形あらたなり。秦  
皇徐市を疑はゞ。りさんぢよの春の風。なほさり  
がてらに渡らめや。漢帝せいしやうを用ひはずは。  
霸陵原の秋の月。心凄くは澄まざらまし。誠に人

間の妙奇仙境の秘跡なり。

歌

「一度も。歩みを運ぶともがらは。三千界の内にま  
づ。無量福の宝を得。一期生の後に早く。再び天  
の位に至る。かゝる誓ひの海山も。猶万代の末か  
けて。靡き従ふ此国の。尽きせぬ御代は有難や。

く。

ワキ詞

「我江の島に上り。山海の致景を詠め。事の由をう  
かゞふ所に。海人あまた来れり。如何に翁。御事

は此浦の者か。

シテ詞

「さん候此浦の者にて候ふが。毎日此島に上り。山上山下岩窟社々を清め申す者にて候。さて御身は何処よりの御参詣にて候ふぞ。

ワキ  
「是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なるが。此島涌出の由聞し召され。事の子細を悉く尋ね見て参れとの宣旨に任せ。是まで勅使を下さるゝなり。委しく子細を申し候へ。

シテ  
「さてはかたじけなくも帝よりの勅使にてましますぞや。そもそも此島は。欽明天皇十三年卯月十二日戌の刻より。同じく二十三日辰の刻に至るまで。

江野南海湖水湊の口に雲霞暗く蔽ひて。天水紛紜たり。大地震動する事十日があまれり。とばかり有りて天女雲上に顯はれ。童子左右に侍り。もうくの天衆龍神水火雷電。山神鬼魅夜叉羅刹雲上より磐石を下し。海底より塊砂を噴き出だす。

ツレ「かい／＼たる雷の光りせいくを万天の間に飛ばし。

シテ「霹靂帛を裂くが如し。 波浪金を湧かすに似たり。

ツレ「宕巖多く浮べ出だし。 夜叉鬼神島を作る。

シテ「或ひは銅杵を持つて打ち砕き。

ツレ「或ひは鉄杖を持つて裂き破る。

シテ「又は二つの岩を押し合はせ。

ツレ「又は一つの石をそばだてたり。

シテ「とりぐに島を作り給へば。 梵天帝釈四大天王。

上界の天人下界の龍神。

ツレ「残らずこゝに顯はれ給ひ。

二人「おの／＼是を衛護し給ふ。 其後藹雲をさまりて。

海上に一つの島をなせり。 即ち江野になぞらへて。

江野島とは是を申すなり。

ワキ

「謂を聞けば有難や。 即ち是は明君の。 直なる御代  
のしるしを見せて。 かかる奇特を拝む事よと。 い

よく御影を仰ぐなり。

詞

「さて此島は天部の影向。又は如何なる御神の。鎮守と顯はれ給ふらん。

シテ詞

「中々の事此島に。各諸神まします中にも。龍口の明神は。天部と夫婦の御神にて。衆生濟度の御方便。あがめても猶余りあり。

ワキ 「実に有難やかくばかり。深き恵みの海山も。猶万歳を呼ばふなる。

シテ

「声か松吹く風の音の。

ワキ 「涼しき巖に寄る波も。

シテ 「治まる國のしるしを見せて。

ワキ 「豊かに住める。

シテ 「此時を。

地 「万代の。始と今日を祈り置き。始めと今日を祈りおきて。今行く末も此島の。誓ひは尽きぬ無量億の。楽しみの数々を。受け継ぐ国ぞ久しき。善神は一切の福を授け。悪神は万里の。禍をはらふ浦

風も。天部の誓ひなるとかや。頼め猶隔てなき。

真如の玉も曇らじ。

ワキ詞

「猶々江の島に於てめでたき子細さまぐ有るべし。

残さず申し候へ。

地クリ

「そもそも江の島と云つば。其めぐれる事三十余町。

其高き事數十余丈なり。

シテサシ

「水は山の影をふくみ。山は水の心に任せたり。

地

「壇中の砂清淺たり。白雲の破るゝ所に。洞門開け

て翠屏顯はれたり。岩窓の奥遙かに入つて。峨々  
たる巖の間より。落ち来る水は西天の。無熱池の  
池水なるとかや。

シテ  
「禪定無漏の仙人は。

地  
「此地を占めて住家とし。弥陀有縁の教主は。此島  
に来つて生を導く。

シテ  
「二世安樂の此島に。

地  
「誰か頼みをかけざるべき。

クセ

「こゝに又。いにしへ武藏相模の境に。鎌倉海月の間に。深沢といふ湖あり。彼湖に大蛇住めり。其身一つにして其頭五つあり。隆準の鼻胡鬚の腮。眼に白日をつなぬき。身に黒雲をまつへり。然れば神武天皇より。垂仁天皇の御宇までは。十一代の帝祚を経。七百余歳の年祀を経て。国中に満ちて人を取る。

シテ

「景行天皇の御宇に至り。

地

「龍悪いよく盛んなれば。人皆石窟に隠れ住み。涕哭の声限りなし。時に天部は龍に向ひ。汝が悪心を翻し。殺生をとゞめ。此国の守護神とならば。夫婦の語らひを我なすべしと。堅く誓約し給へば。龍王も是に応じつゝ。今より殺害をとゞめて。善心を思ひ龍の口の。明神となり給ひ。国土を守護し給ふなり。

ロンギ地

「はや時移る夕雲の。く。斯かる神秘も大方の。

浦人いかで木綿四手の。神の告かや有難や。

シテ

「中々なれや大君の。御言畏み勅に今ぞ。応ずるし

るしを顕はさん。夜すがらこゝに待ち給へ。

地

「勅に応ぜんしるしとは。そもそも老人は誰やらん。

シテ

「誰とはさてもおろかなり。我は五頭龍。

地  
「今は又。天部の夫婦の神となりし。龍口の明神とは。老人を見るべし。今宵の月に天部の御姿。我姿をも顕はすべしと。夕波に立ちまぎれつゝ。失

せ給ふこそあらたなれ。く。(申入)

ワキ

「岐伯が絶技を先に揚げ。張儀が英声を後に馳す。是れ聰明勇進弁財天の。

地  
「無量無辺不可思議の功德を。さまざま顕はしあします。

天女  
「月も照り添ふ如意の宝珠の。光りを誰か仰がざ

る。

地  
「仰げなほ。く。意の如しと聞く時は。

天女

「今此君の。 それと御影に逢ひに逢ふ。

地 「卞和が玉も何ならず。 彼如意宝珠を君に捧げんと。 光りもかゝやく御殿の扉。 左右に開けて十五童子。 天部の御姿顕はれたり。

地 「衆生濟度の其御方便。 衆生濟度の其御方便も。 先づ福壽円満の願ひを叶へ。 現寿無比樂後生清淨と。 曇らぬ宝珠を君に捧げんと。 勅使に是を授け給ひ。 舞樂を奏し拍子を揃へ。 羽袖を返して舞ひ給ふ。

地 「天人聖衆菩薩の舞も。 く。 かくやと思ひ白波の。 立ち来る沖に雲暗がつて。 はやて吹き立て逆巻く潮は。 五頭龍王の出現かや。

後ジテ

「我昔は深沢の池に住んで。 五頭龍王と顕はれ。 今は国土の守護神となる。 龍の口の明神なり。 聞きしに替はらぬ因位の形。 く。

シテ

「頭は五頭龍。

地 「胡鬚の腮。 眼に白日をつなぬき。 其身に黒雲をま

つへり。苔むす松も野べ伏す巖の。峨々たる上に  
ぞ顯はれたる。

シテ  
「神仏水波の隔てなり。

地「神仏水波の隔てなれば。同一体の。利益もさま  
ぐの。弁財天部は威光を顯はし。明神もろと  
もに百千劫の。齡を守らんと約諾堅き。岩間を  
伝ひ。涼み取るてふ緑の海に。飛行し給へば。  
磯うつ波も龍の口の。明神忽ち威を振ひ雲を吹  
き。嵐にかゝやく眼の光りは。天地に満ち満てり。  
其時天部は童子を伴なひ。紫雲の上に顯はれ給へ  
ば。明神立ち来る黒雲に乗じ。光りを放つて島  
根を廻ぐり。めぐりめぐるや暫しが程は。とり  
ぐ姿を雲中に顯はし。とりぐ姿を雲中に顯  
はすも。実に有難き影向かな。